

# コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年8月18日

BMJ:

妊婦に対するmRNAワクチンの安全性に関する証拠が増えている

## 【松崎雑感】

妊娠中に新型コロナワクチンを受けると、流産するとか胎児に大きな影響があるなどの言説がありましたが、そのようなことはなく、かえってワクチン接種により、新型コロナ感染による妊娠経過の大幅な悪化が防がれることが証明されてきました。今回紹介する論説は、それに加えて、妊娠女性のワクチンの副反応が非妊娠女性の副反応よりも低かったというデータです。

## 妊婦に対するmRNAワクチンの安全性に関する証拠が増えている

Wise J. Covid-19: Study provides further evidence that mRNA vaccines are safe in pregnancy. *BMJ*. 2022;378:o2013. Published 2022 Aug 12. doi:10.1136/bmj.o2013

カナダでの調査によれば、妊婦は、同年代の非妊娠女性よりもmRNAワクチン接種後の重い副反応が有意に低いという[1]。

報告では、二回目のmRNAワクチン接種後に仕事や通学を休んだり、医療機関受診が必要な副反応が発生した率は、妊娠女性の7.3%に対し、非妊娠女性では11.3%だった。

この論文はLancet Infectious Diseasesに掲載され、妊娠女性に対するmRNAワクチン接種の安全性がさらに明らかにされた。

1月にアメリカで46079名の妊娠女性を調査したところ、ワクチン接種群で早産や低体重出生リスクが増加することはなかったという[2]。

コロナパンデミック期間中妊娠女性のワクチン接種率は漸増しているが、一般の人々よりは低い状況が続いている。

イギリスで1回以上ワクチン接種を完了した割合は、2022年1月に出産を行った女性の6割（59.5%）だった（2021年11月には48.7%、12月には53.7%）。黒人女性と貧困地区に居住する女性の接種率が最低だった[3]。

Canadian National Vaccine Safety Networkは、14～49才のワクチン接種済み妊娠女性5625名とワクチン接種済み非妊娠女性185,735名、ワクチン未接種妊娠女性339名を調査した。

接種者にはワクチン接種から7日以内、未接種者には質問票記入前7日間の体調不良を申告する調査デザインである。

妊娠女性の接種後体調不良症状は、1回目接種後4%、2回目接種後7.3%に見られた。倦怠感、頭痛、呼吸器感染が多かった。救急外来受診あるいは入院の必要なイベントはすべてのグループで1%未満だった。

ワクチン未接種妊娠女性の体調不良出現率は3.2%であり、ワクチン接種後に妊娠女性が報告した体調不良の一定部分がワクチン接種と関連がない可能性があることが示唆された。

流産、死産の発生率はワクチン接種群で1.4%、未接種群で2.1%だった。

この報告に対して、CDCのサッシャ・エリントン氏とクリスティーン・オルソン氏は「妊娠女性に対するmRNAワクチンの安全性に関する証拠がさらに増えた。

妊娠女性のワクチン接種率は対応する一般女性よりも低い。妊娠中に新型コロナウイルスに感染した場合重症化しやすく、妊娠経過にも重大な影響をもたらす。

今後さらに人市中のワクチン接種の安全性データを集積するとともに、妊娠のどの期間においても、ワクチン接種を推奨することが必要だ」とコメントしている[4]。

この調査のリミテーションは、調査対象者が白人に限られていたこと、そして、症状の申告が接種から7日以内に限定されていたこと、そして自己申告ベースの調査であったことである。他のエスニシティでどうなのか、長期的影響がどうなのかが課題となっている。